

2022年度 入学試験問題

国語

(帰国生入試)

[注意]

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. 解答用紙は、問題冊子の中にはさんであります。試験開始の合図があったら、解答用紙を取り出して受験番号と氏名を記入し、QRコードシールをはりなさい。
3. 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。
4. 問題冊子の余白等は自由に使って構いません。
5. 試験終了後、解答用紙のみ提出し、問題冊子は持ち帰りなさい。

東京都市大学附属中学校

【注意】国語の問題では、字数制限のあるものは、特別な指示がない限り句読点等も一字に数えます。

1 次の文章は、子どもが本を読めない理由について考察した文章です。これを読んで、後の問いに答えなさい。なお、問題の都合上、本文には省略があります。

それにしても、学生たちが小学生時代に「読んで」いたという「人気シリーズ」の内容のお粗末さには、しばしば寒々とした思いにさせられます。ここでは具体的に作品名をあげて論じることはしませんが、たとえばある学生が読みあさったシリーズは、「変な主人公が、変な人たちと出会い、変な出来事が起き、よくわからないうちに大団円。神経がまひしてきそうな話だった」そうです。「おもしろさがへんてこなもので、道理とあっていないくらいいほど、ますます喜んで」読んでいたが、じきに飽きて内容を忘れてしまい、いまでは何も思いつけない、と述べている学生もいます。目立つのは、かなりたくさんの学生が、当時読んでいた本の特徴を語るのに、「次に何が起るのかわからない」という言葉を使っているというところで、どうやらそれが「人気シリーズ」の共通項であつたらしいとわかります。

しかし、「次に何が起るのかわからない」ということは、ほんとうにおもしろいことなのでしうか。私たちが本を読んで心底「おもしろい」と感じるのは、読むうちに人物や世界が見えてきて、「こうなつてほしい」「だいじょうぶだろうか」「きつとこうなる」などと、期待や不安に胸をふるわせはじめたときです。そうになると私たちは先を読まずにはいられなくなり、次々にページをめくつていきます。もちろん、予想はしばしば裏切られますが、よくできた物語は、驚かせると同時に「なるほど」と納得させて、よりよい形で予想や期待を満たすほうへと発展していつてくれます。ときには主人公が八方ふさがりの窮地におちいり、「いつたいどうすれば助かるのか見当もつかない」と思うこともあります。それは「次に何が起るのかわからない」という決まり文句で表現された感覚とは別物です。

それなのに、「次に何が起るのかわからない」と評される作品が増え、それが「人気シリーズ」になるのは、いったいなぜなのでしょう。それについて考えていて、ふと連想したのは、昔話を絵本化するときによく起る問題です。昔話のなかには、お話としてはおもしろいけれども、絵に描こうとすると、どうしても単調になつてしまうものがあります。場面も登場人物も全然変わらなまま、三回のくりかえしがあつたりすると、耳で聞けば楽しめるのに、絵では変化が乏しくてもつたりない気がしてくるのです。そんなとき、絵で楽しませなくてはと思つたり、描くほうがもつと楽しみたくなつたりすると、くりかえしがくりかえしに見えなくなります。絵としては変化に「とんでいて見応えがあつても、それでは昔話の様式には合いません。

すでに存在するお話をあつかった昔話絵本でもそうなのです。物語も絵も新たに作る本の場合、絵の変化が楽しめるということが最初から重要視されたとしても、不思議はありません。ことに、変化の多い映像メディアに慣れたいまの子どもたちを喜ばせるには、ページをめくるた

びに目を驚かせる絵が出てくるのが、必要不可欠と考えられているのではないのでしょうか。しかし、全体の文章量の少ない物語で、絵に変化をつけようと思ったら、ストーリーの自然な展開は望めなくなります。「変な主人公が、変な人たちと出会い、変な出来事が起き」というとつぴな物語が多いのは、そのせいではないでしょうか。

そんなわけのわからない物語でも、^B本物のおもしろさを知らない子どもたちには、とりあえず「おもしろい」と思えるようです。それはなぜかというと、たとえ物語の脈絡がわからず、想像力が働かなくても、ページをめくって絵を見れば、一応わかったような気がするからでしょう。文字だけの本の場合は、話がとびすぎると想像力が続かなくなって放棄することになりかねませんが、絵があつて、その絵に何らかのおもしろさやかわいさ、目新しさなどがあれば、それなりに楽しむことは可能だからです。

しかし、いつもそんなふうだと、先の展開を予想しようという気はしなくなります。予想はせずに、とにかく、来るものを^C受け身で楽しむだけです。これは映像を見るときを楽しむ方でもあるわけですが、読者のほうがそうなったら、本の作り手としては、ますます絵で楽しませることに入れ、物語の脈絡は放棄することになりかねません。どうやら、子どもの本の世界で進行しつつある事態は、そういうことのようなようです。

これは当然ながら、子どもたちの想像力、読書力をどんどん低下させていき、そんな子どもたちにも「読みやすく」と思うと、ますます絵に頼った本を作らざるをえなくなります。最近の子どもたちに人気があると言われる本には、見開きごとに迷路やまちがい探しなどのゲームがあつて、それをつなぐお話はないも同然、といったものすら見られます。それらはもう「読む本」ではなく、「見る本」にすぎません。なのにあいかわらず子どもたちは、「なんでもいいからたくさん」と言われつつづけているのです。それはとんでもない無責任ではないのでしょうか。

「なんでもいいから」というのは、けつして子どもの自由の尊重ではなく、大人が本を選び、子どもに紹介し、読めるようになるまで手を貸すという手間を惜しんでいるのにすぎません。「人気のある本ベストテン」などといった紹介のしかたや、子ども同士に読んだ本を紹介させあう「読書葉書」の類にしても、子どもの尊重のように見えて、じつさいには^D大人の怠慢と言うほかないのです。そういうやり方は、「人気のある本がいい本だ」という思いこみを^bジョジョウし、子どもの選択の幅をますます狭いものにしていきます。図書室には幅広くいろんな本が並んでいても、本についての知識のない子どもたち、本に苦手意識を持っている子どもたちにとつては、何の紹介もされていない本、知っているシリーズでない本、だれも借りていない本は、存在しないも同然なのです。

(中略)

本によしあしの見分け方のひとつとして、ぜひ子どもたちに教えてあげてほしいのが、原作とダイジェストとがいかにかがうかということです。ダイジェストとは、原作を短縮して、やさしく書き直したものをさしますが、ダイジェストがとくに目立つのは、『若草物語』(オールコット)、

『トム・ソーヤーの冒険』（トウエイン）、『ハイジ』（シュピリ）などといった、いわゆる「名作児童文学」の分野です。これらの作品は、原作の長さはまちまちであるにもかかわらず、一定のページ数に統一した「名作全集」におさめられたり、全体でも三十ページほどでその半分は絵という「アニメ絵本」の類になったりして、広く流布るふしています。アニメ絵本の類では、『赤ずきん』や『ももたろう』のように短い昔話から、岩波少年文庫なら上下巻で六百ページ近い『ハイジ』のようなものまでが、おなじ長さにまとめられています。短い昔話やアンデルセンの短編などでも、アニメ絵本の長さにするためにはかなり削けずる必要があります、乱暴な省略や書き換えかでも、物語が台無しになっていることが多いのです。ましてや、長編の物語を何十分の一角に縮めてしまうと、おおよそのあらすじさえ正確には伝わりません。でも子どもたちには、原作とダイジェストの区別がわかりませんから、「自分は『ハイジ』を読んだ」「トム・ソーヤー」を読んだ」と、信じて疑うっていないのです。

（中略）

ダイジェストすることがいかなる場合にも絶対に悪いわけではありません。とくに、古い作品の場合など、長すぎる説明を削けずったり、枝葉の部分を多少整理したりすれば、いまの読者にもずっと読みやすいのと思うことだってありますし、そうやって作られた優れたダイジェストもちゃんとあります。ただし、ダイジェストとして許せるのは、あくまでも原作を尊重し、そのよさを損そなわないように注意しながら刈かり込こんだもので、しかも、あとがきなどに、それが原作どおりでないこと、どんな方針でどれくらい縮めたものであるかということcを、メイキめいきしてあるものだけです。現実にはそんなものはごくわずかで、たいていは強引ごういんに一律のページ数にしたシリーズですし、縮めたことについてひとことの断り書きもないものも珍めづしくはありません。

（中略）

ダイジェストが原作のよさをいかに損そなっているかを理解していただくために、一例として、バーネットの『小公子』を取り上げてみましょう。これはいわゆる「名作」を代表する作品のひとつですが、おおまかなあらすじだけだといかにも大時代的で、推薦すいせん図書とのリストに加えるのが気恥きはずかしくなるほどです。じつさい、無邪むじゃ気で気立てのいい孫ひらに出会うことで、気むずかしかったおじいさんがいいおじいさんになり、まわりじゅうみんなが幸せになる、というのは、甘あまったるくて白々しく思えてしまう筋書きです。ちなみに、いま書いた筋書きは、『ハイジ』にもそっくりそのままあてはまります。しかし、原作をちゃんと読むと、『小公子』と『ハイジ』は全然ちがう物語であり、しかもどちらもが、読んでみると少しも白々しさを感じさせず、真実味にあふれているのがわかります。

なぜそんなことが可能なのかというと、それは、物語の細かい設定、たくさんの登場人物一人一人の性格や言動、出来事の細部などが、ほとんどありえない物語を成り立たせるために、ひじょうにうまく工夫くふうされているからです。たとえば、『小公子』の筋書きが成立するためには、主人公のセドリックが祖父である伯爵はくしやくのほんとうの性質に気づかず、「いい人だ」と思いこみ続け

なくてはなりません。一方、セドリックは幼いけれども利発な少年ですから、そんな誤解を続けるのは、不自然と言えば不自然です。また、かんしゃく持ちで意地の悪い伯爵が、孫からその性質を隠しおせるのも不自然です。この難問をうまく解決するのが、セドリックの独特な生い立ちです。この作品の冒頭の数ページは、バーネットという作家のなみはずれた力量をあますところなく示していますが、そこを読めば、母親とのとくべつな絆がどんなふうになぐくまれ、その結果セドリックが、ある部分ではとてもまかせているのに、ほかの部分ではとても無邪気で、とくに母親の言葉には絶対の信頼を置いているのだということが、自然に納得できます。その母親が「おじいさまはいい人だ」と言ったのだから、セドリックは何があるかとそれを信じて疑わないのです。

さらにうまいのは、セドリックがニューヨークの下町で育ち、じつは教養などない商人にすぎない食料品屋のホップスさんを尊敬し、珍妙な友だちづきあいをして育ったということです。孫が半分アメリカ人だということは、イギリスの貴族である祖父にはますます気に入らないことではあるのですが、このカルチャー・ギャップが誤解をさらにふくらませ、真実が露呈するのをうまいぐあいにふせいでいます。セドリックがイギリスの下町の言葉を混ぜて使っていたら、伯爵は下品だと顔をしかめたでしょうが、ホップスさん仕込みの奇妙な言いまわしは、風変わりに響いてむしろ伯爵をおもしろがらせ、孫に真の愛情を感じはじめまでの時間をかせぐ役割を果たしています。

でも、こうした細部の行きとどいた工夫は、ダイジェストからは根こそぎ削られてしまいました。その結果、伯爵は孫の顔を見たときに人格がコロッと変わる、真実味のかけらもない人物になり、セドリックも、一風変わった個性を奪い去られ、「こんな子、いるはずがない」と思わせる、ただの「いい子」としか見えなくなります。『ハイジ』については省略しますが、おなじく「気むずかしいおじいさん」でも、二人の老人の性格や、なぜそうなったかの理由は全然ちがいで、その性格が変化してくる過程もまったくちがっています。これらの作品を成り立たせている巧みな工夫を見るにつけ、これらが「名作」と呼ばれるのは、だれもが「こうあってほしい」と願う夢物語を、「こんな人たちがいて、こんな状況だったら、ほんとにこんな結果になるかもしれない」と信じさせるように書き切っているからだとわかります。でもダイジェストは、その真実味をきれいさっぱり抜き去ってしまい、あとに残るのはせいぜい甘すぎる夢物語、悪くするとお説教がましい美談だけです。そんなものを本物だと思って読んだら、「名作がこんなものなら、本なんてつまらない」と誤解し、本離れしたとしたり、なんの不思議もありません。

(脇 明子『読む力は生きる力』より)

問6 ——線E「細部の行きとどいた工夫」とありますが、『小公子』にみられる工夫とはどういうことになりますか。その説明として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 セドリックが祖父の伯爵の意地悪さに負けることなく耐えていくことで、伯爵がセドリックに抱いていた疑いを少しずつ無くしていくということ。
- 2 母親から「おじいさまはいい人だ」と聞かされていたことによって、セドリックは初めて会った時から祖父の性質を誤解せずにすんだということ。
- 3 ホップスさんという無関係に思える人物の存在が、セドリックと伯爵を結びつけて自然な形で伯爵が孫に愛情を注いでいくようになるということ。
- 4 セドリックの恵まれぬ生い立ちが徐々に明らかにされることによって、伯爵がセドリックに対し次第に愛情をつのらせるようになるということ。

問7 ——線F「『こんな人たちがいて、こんな状況だったら、ほんとにこんな結果になるかもしれない』とありますが、これは読む人がその作品をどのように思っているということになりますか。文中から十字でぬき出しなさい。

問8 この文章から読み取れる、子どもの本離れの理由はどのようなものですか。その説明としてふさわしいものを次から二つ選び、番号で答えなさい。

- 1 テレビやゲームに慣れた子どもたちには、本を読むという行為は視覚的な効果がなく、まったく興味の持てないものだから。
- 2 夢物語のような自由に想像力をはたらかすことのできる作品さえ、話の展開を予測しながら楽しんで読むことができないから。
- 3 登場人物や物語の世界を把握できない、わけのわからないような作品では、本当のおもしろさを実感することができないから。
- 4 すぐれたダイジェストを読むと、わかりやすく手軽におもしろさを感じられるので、ダイジェスト以外は読まなくなるから。
- 5 たとえ名作と言われる作品であってもダイジェストが適切でなければ、本からの楽しみや満足感を得られないから。

② 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「そんな端を歩くと危ないぞ」

ケン坊がうしろから言った。川幅は、このあたりで少し広くなる。あと何キロか下ると海だ。河口から飛んできたカモメが向こう岸の工場の屋根にとまっている。ケン坊はわたしのみつあみの片方を軽く引っぱった。

「いたいよ」とわたしが言うと、ケン坊はかすかに笑った。家に帰ってきてから、ケン坊はかすかに①笑わなくなってしまった。昔はあんなにふわっと大きく笑ったのに。

「犬の紐がわりだ」そう言いながら、ケン坊はもう一度みつあみを引っぱった。カモメが高く鳴いた。平たい石をひろって、わたしは水面に投げた。石は一つだけ水を切って飛び、すぐに沈んだ。

「少し、できるようになったな」言いながら、ケン坊はわたしの横に来て並んだ。わたしがおもいきり背伸びをしても、ケン坊の胸までしか届かない。ケン坊はその大きなたのひらにちょうどいい大きさの石をのせて、ぐっと肩を落とす。そのまますいと石を投げる。石は水面を何回も切って、向こう岸に近いところまで飛んだ。

①「すごいね」わたしは言ったが、ケン坊は少しまばたきをしただけで、無言のまま岸に腰をおろした。わたしもケン坊の隣に座った。ケン坊は、しばらく川の流れを見ていた。わたしもまねして川の流れを見た。ずいぶん長い間、ケン坊は川を見ていた。

ケン坊はとつと成人しているが、近所の人たちはみんな今も「ケン坊」と呼ぶ。賢太郎という本名でケン坊のことを呼ぶのは、よその人だけだ。何年か前に母が切り抜いた新聞には、「進藤賢太郎一位指名」という文字があった。

「それなに」と母に聞くと、「ケン坊のことが新聞に載ってるんだよ」と母は答えた。

「何か悪いことでもしたの」わたしが驚いて聞くと、母は笑った。

ケン坊は、高校在学中にプロ野球の投手として球団に指名されたのだ。指名だのプロだのという言葉の意味が、そのころのわたしにはわからなかった。入団の四年後、ケン坊は練習中に利き腕を怪我した。数カ月後に新聞に載った「進藤、自由契約に」という言葉の意味を、もうわたしは理解できるようになっていた。「キャンプ」だの「遠征」だので家に居つかなくなったケン坊が家に戻ってきたのは、それからしばらくしてからである。

帰ってきたケン坊は、めったに家から出なかった。ケン坊のところのおばさんは、わたしの家に来ては母に何かと相談した。ときおり、おばさんが話の途中で泣きだしてしまうこともあった。そういうとき母は台所から厚く切ったようかんの皿を持ってきて、おばさんに勧めた。甘いもの食べると、気が落ちつくよ。②人間万事塞翁が馬。そんなことを母は言いながら、ようかんをしきりに勧めた。

ケン坊のおばさんは、そのうちにあまり泣かなくなり、ケン坊もときどき川の土手を散歩したりするようになった。ケン坊ががらり戸を開ける音をききつけると、わたしはいそいで玄関に走り、サンダルをひっかけ、ケン坊の後を追いかける。大きなケン坊ががらり戸を開ける音は、ケン坊のところの小柄なおばさんがたてるぴしゃぴしゃした音よりも、よつぽどやさしく響いた。

「なあ、春子」ケン坊が言った。ケン坊に、春子、と呼びかけられると、いつもわたしのおなかのあたりは、とくんとくんとなる。③ 温水プールの水みたいになまあたかい何か、おなかの中に満ちてくる。

「なに」わたしはぶつきらぼうに答えた。ケン坊にわたしのおなかの中に満ちてくるものの存在を、決して知られなくなかった。ケン坊だけではない、母にもケン坊のおばさんにも担任の雅代先生にも親友のキョウコちゃんにも、誰にも知られなくなかった。知られたとたんに、それはわたしの体のどこかにある見えない栓からしゅうつと流れ出て、あとかたもなく消えてしまうような気がした。

「たい焼きでも食うか、それともアイスにするか」

アイス、ときつぱり答えて、わたしはケン坊の先に立った。④ アイスならば、「稲や」のおぐらアイスだろう。ケン坊はゆつたりとした大股で、わたしの後をついてくる。川と平行する道ぞいに「稲や」はある。町工場や文房具の間屋や小さな商店がぼつぼつと並ぶ、狭い通りである。「村山紙工」という字を横腹に書いたトラックが、わたしの目の前をぶうんと通りすぎた。このところ雨が降っていないくて、道は少しほこりっぽい。角のお稲荷さんに、※ひかなくくら 緋寒桜が咲いていた。

「春子、あぶないな、もつと端を歩け」ケン坊が言った。

「さつきは、端を歩くなって言った」わたしが答えると、ケン坊はわたしの頭のとっぺんをのひらではたいた。

頭たたかないでよ、ばかになるから、と言いながらわたしはケン坊の腕につかまった。そのままケン坊の腕にぶらさがるようにして、通りを歩いた。わたしはいちいちどの店の前でも立ち止まった。ケン坊もしばらくわたしにつきあって止まるが、すぐに歩きはじめる。早く来い、といながら、わたしのセーターを引っばる。

「ほんとに犬の散歩だな、春子と歩くのは」ケン坊は言って、空を見上げた。見上げるケン坊の頬のあたりが、削げている。ケン坊、とわたしは呼びかけようとしたが、ケン坊のまなざしがあるまじり静かすぎて、呼びかけられなかった。

通りのはずれに釣餌屋があった。「いい赤虫あります」だの「ぶどう虫分けます」だのと書いた手書きの札が窓ガラスに貼りつけてある。わたしが札を読んでいると、ケン坊は「おっ」と声を出した。

A※
「水かまきりがあるよ」

店の前にたらいが置いてあって、中に肢の長い昆虫がいた。何種類かの藻が漂う水の面に、ふ

わりと浮ういている。

「水かまきりっていうの、これ」

B 「今いまどき珍しいなあ」

そのままケン坊はじつと水かまきりに見入った。水かまきりは、ぜんぜん動かなかった。たらいを手で揺ゆらしても、ただじつと浮ういているばかりだ。

「死んでるのかな」わたしが聞くと、ケン坊は「死んでるのかもな」とゆつくり答えた。

ケン坊のまなざしが、さつき空を見上げていたときと同じように、いやに静かだ。たらいはいくつかあって、ほかのたらいには、透すき通とおった小さなえびや小魚が何なん匹びきかずつ泳およいでいる。

「ケン坊」わたしは小さな声で言った。わたしのすぐ横でしゃがんでいるケン坊の体温が、隣のわたしに伝わってくる。ケン坊はいつも大きくてあたたかい。ケン坊は、じつと水かまきりのたらいを見つめていた。

「ケン坊、アイス食くべに行いこう」わたしが言うと、ケン坊は立ち上がった。もう一度空を見上げ、少しため息をついて、歩きはじめようとした。

C 「あ、水かまきりが」

わたしは声をあげた。水かまきりが、水面から水中に沈しずもうとしていた。長い肢あしを静かに動かし、尻しりからつき出た棒ぼうのようなものを水面にたてて、水かまきりはゆらゆらと水の中を泳およぎはじめた。

「お」ケン坊も声をあげた。

「生きてるなあ」

D 「生きてるねえ」

ケン坊とわたしは顔を見あわせた。水かまきりはゆつくりと底まで沈しずみ、それからふたたび水面に上がってきた。風が吹ふいて、たらいの水をかすかに揺らした。よし、とケン坊は小さくつぶやいた。よしよし、生きてたんだな。小さく強く、ケン坊はつぶやいた。

「春子、行くぞ」そう言って、ケン坊はどんどん歩きはじめた。わたしはケン坊のあとをあわてて追おった。春の暖かな風が、ケン坊の短い髪かみをそよがせる。稲いなやの前まで、ケン坊はひといきで歩あいた。

「おぐらアイス、二個ずつ食くうか」ケン坊は言って、笑った。久しぶりに聞く、ケン坊のふわっとした大きな笑いだった。うん、二個ずつだね。なんだかわからないけれどわたしも嬉うれしくなって笑いながら、答こえた。ケン坊は店の奥おくに向かって、おぐら四本ね、と大きな声で言った。風が、稲いなやの前に植うえてある※ おもとの葉はを、揺らした。

(川上弘美「水かまきり」全文)

※緋寒桜……暖地に育つサクラの一種。二〜三月に濃こいピンクの花が咲く。寒緋桜ともいう。

※水かまきり……池や沼にすむ水生昆虫。「尻からつき出た棒のようなもの」は呼吸管で体長以上の長さがある。

※おもと……ユリ科の多年草。葉は厚くつやがあり、赤い実をつける。園芸品種が多い。漢字で「万年青」と書く。

問1 空らん 1 には、打消しの言葉と組み合わせられて使われる言葉が入ります。ひらがな二文字で答えなさい。

問2 ——線① 『すごいね』わたしは言ったが、ケン坊は少しまばたきをしただけで、無言のまま岸に腰をおろした」とありますが、この時のケン坊の気持ちの説明として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1 野球のことなど知らない春子にほめられたところで何のメリットもないため、ケン坊はこたえる気持ちをなくしている。

2 春子が無邪気に喜んでくれている様子を見て、ケン坊はもつと良いところをみせたいのだがとはずかしい気持ちになっている。

3 野球をやっていない春子が突然ピッチングを評価したので、ケン坊は驚いてお礼を言う気持ちの余裕をなくしている。

4 春子はただ純粋に感心してすごいと言っただが、ケン坊が思うすごいピッチングとは違うので複雑な気持ちになっている。

問3 ——線② 「人間万事塞翁が馬」は中国の古典に由来する成句です。どのような意味を表していますか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1 人生における不幸な出来事の中にも、せめて幸運ともいえることが起き得るということ。

2 人の幸せ不幸せは自分自身の行いが招いたものだから、あきらめるしかないということ。

3 人生において何が幸せになり、何が不幸せになるかは予測がつかないものということ。

4 人の幸せ不幸せは神や権力によって決まるものだから、気にしてはいけないということ。

問4 ——線③ 「温水プールの水みたいになまあたたかい何か」とは何を表していますか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1 自分を犬のように扱うケン坊に対して感じている不満のようなもの。

2 乱暴なようで優しいところのあるケン坊に対する好意のようなもの。

3 不幸な怪我に見まわれたケン坊に対するあわれみや同情のようなもの。

4 ケン坊と会うと何かが食べたくなってしまはずかしさのようなもの。

問5 ——線④「アイスならば、『稲や』のおぐらアイスだろう。」という文について、A君・B君が考えました。次の会話文の空らん a ～ d には「が」もしくは「は」が入ります。そのうち「は」が入る空らんはどれですか。組み合わせとして最もふさわしいものを後の1～6から一つ選び、番号で答えなさい。

A 「アイスならば、『稲や』のおぐらアイスだろう。」って変な文だね。
B どこが？

A アイスを選んだら、何が『稲や』のおぐらアイス」なんだろう。

B 何が…って、そりゃ「食べるべきアイス a 」、ということでしょ。省略されているけど。

A そこなんだよ。「何 b 」って考えているんだから「食べるべきアイス c 」って補いたいけど、そのままじゃ入らないでしょ。

B 「が」と「は」は同じようなものだから、どっちでもいいじゃん。

A 同じなら「何 d 」「稲や』のおぐらアイスなんだろう。」って聞いてもいいよね。でも、それは日本語として変だ。

B そう言われると「が」と「は」は同じじゃないね。

A それ以前に、文として何が省略されているわけじゃないんじゃないかな。英語だと「何が」、「何は」に当たる言葉があるのが当たり前だけど、日本語の場合はなくても文として成り立っているような気がする。

B たしかに「何が」って考えても、はつきりした答えはないような気がしてきた。

A 言葉って不思議だね。

1 a | b 2 a | c 3 a | d
4 b | c 5 b | d 6 c | d

問6 この小説において「水かまきり」はケン坊の暗喩(暗喩)として用いられていると考えられます。本文中、「水かまきり」によって明るい見通しが初めて示されるのはどの部分ですか。～線A～Dのうち、最もふさわしいものを一つ選び、記号で答えなさい。

A 「水かまきりがあるよ」

B 「今どき珍しいなあ」

C 「あ、水かまきりが」

D 「生きてるねえ」

問7 この小説の表現について説明したものとして当てはまらないものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 劇的な物語の展開はないが、淡々とした表現で登場人物の微妙な心情が描かれている。
- 2 登場人物が交わす会話は短い、気持ちの通じ方は十分わかるように描かれている。
- 3 今後の展開が植物や人物名などによって暗示され、想像できるように描かれている。
- 4 物語が時間の流れのとおり展開しており、複雑な事情がわかりやすく描かれている。

3 次の詩を読んで、後の問いに答えなさい。

万物節ばんぶつせつ

山村暮鳥

雨あがり

しっとりしめり

むくむくと肥え太りこふと

もりあがり

百姓ひやくしやうの手からこぼれる種子たねをまつ大地

十分によく寝てめざめたような大地

からりと晴れた蒼空あおぞら

雲雀ひばりでも啼きそうな日だ

いい季節になった

穀倉こくそうのすみっこでは

穀物のふくろの種子もさえずるだろう

とびだせ

とびだせ

虫けらも人間も

みんな此この光の中へ！

みんな太陽の下にあつまれ

(詩集『風は草木にささやいた』より)

問1 この詩の題名「万物節」の「節」の意味として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1 きまり 2 つながり 3 おいおい 4 ひかえめ

問2 この詩でえがかれている季節として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1 真冬 2 早春 3 盛夏せいなか 4 初秋

問3 この詩について説明した次の1～6には、まちがいをふくむものが二つあります。その番号を答えなさい。

- 1 一行目から四行目までは行末を同じ音でそろえる「韻」を使い、短いことばを重ねるところで自然の躍動感を伝えている。
- 2 五行目と六行目では一転して長さのある表現を用いて「体言止め」で結び、どつしりとした大地の安定感を表している。
- 3 七行目から九行目にかけてはことばの流れを変化させる「倒置法」が使われていて、季節が持つところよさを伝えている。
- 4 十行目から十一行目にかけては人間以外のものでさえもいきいきと活動するようすを、「直喩法」を用いて表現している。
- 5 十二行目と十三行目の二行ではまったく同じことばをくりかえす「反復法」を用いることで、作者の強い思いを表している。
- 6 十四行目から最終行にかけては「呼びかけ法」を使うことにより、この詩の主題が効果的に伝わるように工夫されている。

問4 この詩で作者が表現したかったこととして最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 毎年同じように生物たちは活動をくりかえす。人間をふくめた生物たちが大自然の中では平等であることをこの詩で表現しようとしている。
- 2 小さな動物や植物でさえ季節にあわせて活動をはじめめる。こうした自然のめぐりの中の生き物の力強さをこの詩で表現しようとしている。
- 3 動植物や人間はたがいに支えあって生きている。こうした生き物たちのいとなみがつくる自然の豊かさをこの詩で表現しようとしている。
- 4 この自然の中では人間も生物の一つにすぎない。人間だけが特別だと思いこんでいた時代が終わったことをこの詩で表現しようとしている。

4 次の問いに答えなさい。

問1 1～4の文には、漢字の使い方としてふさわしくないものが、それぞれ一つずつあります。例にならって、正しい漢字に直しなさい。

例 富士山はその美しい姿を湖面に写していた。 写 ↓ 映

- 1 企業が利益の追究をはかるのが、資本主義経済である。
- 2 明治時代の末期には、すぐれた作家がたくさん表れた。
- 3 学問を収めようとしたら、不断の努力を続けることだ。
- 4 二つのものを対称して、たがいの特性を見極めていく。

問2 問1の4で直した正しい漢字について、その部首名を答えなさい。

